
なんとか山のなんとか様

れん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なんとか山のなんとか様

【Nコード】

N4649Y

【作者名】

れん

【あらすじ】

両親の死がハジマリ。

親戚中をたらい回しにされ、やっと見つけた？居場所？

これは、都会から田舎に引っ越した少年が、村の人たちとの親睦を深めつつ、必死に強く生きようとする物語。

そして少年は、その村の？カミサマ？に会った

・・・

これは「小説&まんが投稿屋」にも投稿している作品です。

会

出合いは、天のどこかでふんぞり返るカミサマが決めた、決して逆
らえないモノ。

だが願わくばこの出合いだけは . . .

誰が決めたわけでもない、自分だけの道だったと言いたい。

ガタン、ゴトン、ガタン、ゴトン
電車が走る。

木と木の間に通る線路の上を、規則正しく走る。
電車の風に靡く木々は会話をするように葉を擦り合わせ、木々の下^{もと}
に住む生き物もまた、その風に心地よさを感じていた。

電車に揺られながら、一人の少年が窓の外を眺めていた。
少年の体は電車の動きになんの抵抗も見せず、なすがままに揺れ、
その瞳に映る景色は複雑な光を帯びていた。

電車の終点は小さな村だった。
と言うのも、少年は都会から越してきたために小さく見えるだけで、
本当のところはそこまで小さい村ではなかった。
だが、周りが木々に囲まれた村も、いつもより大きく見える青い空
も、少年の頬を撫でる温かな風も全て、今まで少年が日頃培ってき
た常識には存在しなかった。

少年は深く、深く、深く
深呼吸をし、この新鮮な気持ちを
充分と味わった。

「や、達也^{たじや}くんだよね？」

背後から声をかけられ、少年 達也はピクリと肩を震わせた。

「あ、はい。えっと・・・これからお世話になります、叔父さん」

達也は遠慮がちに答え、深々と頭を下げた。達也の金髪が、ふわりと揺れた。

叔父はクスクスと笑うと、困ったように眉を下げた。

「こらこら、これから僕たちは家族になるんだよ？敬語なんてやめてよ」

達也は叔父の言葉に若干驚きながらも、改めて言い直す。

「これから、よろしく」

「それでよし」

叔父は子供っぽく笑い、満足そうに頷いた。

達也の叔父への第一印象は『よく笑う人』だった。

「達也くんは何歳なんだっけ？」

「十七、高校二年になります・・・なるんだ」

どうしても敬語になってしまう。昔から親戚中たらい回しにされ、厄介者として育ってきたからか、一度ついた習慣はどうしても拭い取れずにいた。

敬語を使うのが当たり前だった状況下から、いきなり『敬語はいらない』と言われたことは一度もなかった。だからいつもは目の前が真っ暗になり、呼吸が苦しくなるのだが、今叔父と一緒に歩いていることは苦ではなかった。

「そっかあ、大きくなったね」

叔父は嬉しそうに笑う。

叔父と会ったのはこれが三回目だった。

一回目は叔父が父に会いに来た時、二回目は父の葬式、そして三回目
目が現在だ。

あまり面識はなかったが、叔父は達也のことをよく覚えていると言
った。

「その金髪は、染めたの？」

「ああ、俺のもともとのクラスでは大半が染めてたよ」

「やっぱ都会人だなあ、達也くんは」

他愛無い会話を交える度、叔父は嬉しそうに笑う。

まるで達也と話していること自体に喜んでいるみたいに。

「ああ、着いたよ。ここが僕の家、達也くんがこれから住むところ
だよ」

達也の瞳いっぱいに映る家は、大して広いわけではないが、狭いとも
言えない広さだった。

屋根は空と同じ青い色で、壁は薄い黄色の、ここらではよく目立つ
家だ。

塀から覗く草木は、鮮やかな桃色や赤色で彩られている。木々や花、
畑に植えられている野菜や果物は、いかにも手が加えられてい
ると言うように綺麗な形で保たれていた。

「あの庭って、叔父さんが手入れしてんのか？」

「そうだよ、僕の趣味なんだ」

ふわりと香る花の香りをそっと楽しみながら、家の扉を開けた。

「さあ、入って入って」

「あ、ああ。入る、入るから押すなッ」

背中をぐいぐいと押す叔父の力を受けながら、遠慮がちに中へ入る。

中は意外に綺麗だった。

決して新しいと言うわけでもないが、汚いと言えるわけでもなく、
家の中からは温かい葉の匂いがした。

叔父は達也を二階に引っ張っていき、一つの扉の前で動きを止めた。

「ここが達也くんの部屋、昨日掃除したから綺麗だよ」

「あ、ありがとう」

ドアノブを回し、扉をグイッと押す。

綺麗　・ ・ 確かに綺麗だ。

だが、『綺麗』と言うよりは『何もない』と言ったほうが正しいだろう。

言葉通り、部屋の中には何もなかった。向かいにある窓からは、青い空と風に揺れる木々が覗いている。

「荷物は明日届くつてさ。それじゃあ、僕は一階にいるから何かあったら声かけて」

叔父はニコリと笑うと、ヒラヒラと手を振った。

扉を閉め、階段を一段一段降りていく音を聞きながら、達也は深い眠りに落ちた。

・ ・ ・ わあ！！またお前は悪戯をして！！

声がする、誰だろう。

・ ・ ・ まったく。悪戯っ子め、大人

しくしてなさい。

クスクスと穏やかに笑う声と、草木が擦れる音と、流れる水の音。

ここは、どこだろう

・ ・ ・

ふと瞼を開けると、部屋が真っ赤に染まっていた。

窓の外から差す夕焼けの光が、部屋中を染めているのだった。

「寝すぎたか・・・？」

独りでに眩き、いつの間にか横になっていた体を起こすと、ポタリと滴が服に落ちる。

雨漏りかと天井を見上げるが、そんな様子はどこにも見当たらない。

・・・ポタッ

滴は再び服に落ちた。

「あれ、何で・・・」

滴は達也の頬から伝う涙だった。

気付けば段々と視界が歪み出し、鼻の奥が痛む。次々と頬に伝い、顎から落ちた。

達也には涙を流す『理由』が思い当たらず、訳も分からないまま強引に涙を拭いた。

切ない、セツナクナイ。悲しい、カナシクナイ。辛い、ツラクナイ。

この胸に渦巻く複雑な感情はなんだろうか。

苦しい訳じゃないはずなのに、苦しく感じる。

ワカラナイ・・・

「あれ・・・俺、なんか夢見てた気がするんだけど、なんだったかな」

この感情の理由は、夢にある気がしたのだ。

だが、何度夢の内容を思い出そうとしても、まるでどこかへ捨て去ってしまったみたい、面影さえも残っていないかった。

愛

愛を感じたのはついこの前、この村に来て出会ったとき。
この感情を愛だと知ったのは……？

冷たく重い過去を拭い去るこの温かな感情は、紛れもない愛だった。

「そういえば、今日から学校に行くんだよね。場所わかる？」

「ああ、地図も書いてもらったからわかるよ。叔父さんは心配しすぎ」

叔父は台所からひよっこりと顔を出した。

達也は苦笑し、朝食のパンをちぎって口に含む。バターの甘い香りが口の中に広がった。

叔父は自分の分のパンを焼き終わると、それを持ちながら達也の向かいの席に座った。

「だって、ここら辺って結構入り組んでるところ多いからさ。迷ったところに人がいなかったら、助けを呼べないじゃんか」

叔父は眉を下げ、本気で心配しているようだった。

「いやいや、叔父さんが書いてくれた地図すごくわかりやすいから。というか、わからなきゃおかしいからさ、心配しないで」

「そう？」

叔父は、地図を褒めたことには一切触れず、達也の身を案じて訝しげな顔をしていた。

達也は薄く苦笑を浮かべると、「そろそろ行ってくるよ」という言葉を残し、家を出た。

「あ、待つて。達也くん！」

後ろから叔父の声が響いた。叔父が家の扉から上半身だけ出していたのだ。

叔父は手を振ると、言った。

「哉太かなたによろしく、いつてらっしゃい」

『カナタ』とは一体誰のことだろうか。

訳が分からないまま、叔父の見送りを受けて学校に向かった。

一人で歩くのは孤独なもので、話し相手がないことを紛らわすため、時折石ころを見つけては、蹴る動作を繰り返した。

ま、いつも独りだったけどな。

達也は浅くため息をつき、自嘲気味に表情を歪める。

達也の瞳は生まれつき紫色を帯び、その異形で現実離れた光景から、周りにはいつも人がいなかった。幼いころからそれだけの理由で仲間はずれにされ、苛められることも多かった。そのこともあったからだろう、達也は日に日に喧嘩が強くなった。

だが、達也の弟の瞳は至って普通だった。

「兄弟なのに、どうして自分だけ」と、妬んだときもあった。

瞳の色にどれだけ羨んだか、そして自身がどれだけ『普通』を欲したか
・・・

ある日妬みが最高潮に達し、本音を零したことがあった。

「お前の瞳の色が羨ましいよ、本当に　・・・」

ずっとなんとなく溜めてきた、長年の本音を皮肉交じりに言った。

弟は何も悪くない。ただの達也の八つ当たりだった。

だが弟は達也の言葉を聞き、幼いながらに考え、考え、言った。

「僕の目、欲しいの？」

意味が理解できているのか、いないのか。

何故か言葉を発すると同時に、目を抉り出そうとする弟を必死に宥めた。

「違う、違うから。そういう意味で言ったわけじゃないよ」

弟は首をかしげ、笑った。

無垢な心を持った弟の、兄を思った行為に達也は申し訳なさを感じた。一度でも、弟を妬んでしまったことに、恥じらいを感じたのだった。

現在は黒いカラーコンタクトを入れているため、紫の瞳を疎まれることも、忌み嫌われることもなく過ごすことができている。叔父は瞳の色など気にしそうにはないのだが、どうにも隠してしまうのだ。どこかでまだ、叔父を疑っているからだった。

嫌になる、叔父さんまで疑うなんて。

他の親戚と何かが違うことは明らかなのに、少しでも疑い止められないことに嫌気が差す。

達也は再び浅く、今度は卑屈的にため息をつく、目の前に建物があることに気付いた。

「ああ、着いた」

目の前に建っているのは、これから達也が通い始める学校だった。達也はもやもやする感情を必死に隠し、足早に玄関口に向かった。

「え　　・　　昨日言っただろうが、転校生が来たぜ。仲良くしなかったらぶっ飛ばすから、そのつもりで心してかかれよ」

『ぶつ飛ばす』という単語をさらりと使ったのは学校の教師で、これから達也が世話になる、所謂『担任の先生』だった。教師と言うにはあまりにも粗暴で、生徒の前で煙草を吸うなどの教師にあるまじき行為を堂々としてしまうのがこの教師　椿つばきなのだった。これが日常になり過ぎて、この状況を見て生徒が何も言わない時点で、この学校はもう終わりだなと思った。

椿は吸った煙をふうつと吐くと煙草を手に持ち、ガシガシとだらしなく伸びた髪のをを乱した。煙は教室で姿を消し、独特な煙草の二オイだけが充満した。

「先生、窓開けてください」

「ダメエで開けろや」

「先生、臭いです」

「あん？うるせエな、我慢しろ」

「先生、加齢臭じゃないですか？」

「ぶつ飛ばすぞ、俺はまだ24だ」

最初に発言した男子生徒は、呆れ気味に窓を開けた。日常茶飯事とということだろうか。

生徒は面白がり、椿にどんどん不満をぶつけるが、椿は疲れたように強制終了すると、勢いよく達也の背中を押して吐き捨てるように言った。

「じゃあ、達也。自分で自己紹介しやがれ、俺は競馬があるからな」
言いながら去っていく椿を見つめ、静かに思う。

これが俗に言う“ダメ人間”か。

背中が微妙に痛むのを感じながら「渡部達也わたべです、これからよろしくお願いします」と、静まり返る教室の中で、居たたまれない気持ちに負け、考える前に自己紹介をしていた。

「あはは、よろしくな。転校生！」「家どこなの？」「あれ？達也くん、反応ないよ」「つつちの態度に驚いたんじゃない？」「あの

ダメ人間、学校なめてるよ。マジで」

クラスはどつと笑いが溢れる。

騒がしい教室の中心で、達也は呆然と辺りを見回す。

なんか、気が抜けた。

顔に出さなかったが、緊張していた。体にも力が入っていたと思うし、肩も凝っていた。表情が固まらないか心配で、『クラスメートになる人たちが不良だったら』と憶測もしていた。だが、それら全てが馬鹿馬鹿しくなるくらい、緊張が解れた。突然後ろから声がした。

「達也くん。俺、カナタっていうんだ」

カナタ、どこか聞いたことがある名前だな。と呑気に記憶を探る。声の主はクラスメートの男子だった。ニコリと笑顔を浮かべるカナタは、ふと叔父を思い出させた。なんとなくだが、雰囲気似ているのだ。

カナタ？

・・ああ、叔父さんが言ってた。

カナタと頭の中で呪文のように唱えていると、今朝の映像が脳裏で流れた。そういえば『カナタ』は叔父が手を振りながら言っていた名だ。

『哉太によろしく、いつてらっしゃい』

「叔父さんが言ってた、哉太ってアンタのことか」

「アンタって言わないで。俺は、か・な・た！！そう呼んでくれればいいよ」

「俺も、呼び捨てでいいから」

「じゃあ、そうするね」

達也が座っている席の隣の椅子を引き寄せ、勢いよく座った。だが、

会話が続かずに沈黙が漂う。哉太は居心地の悪さを感じていないように、聞いたことのないメロディで鼻歌を歌っていた。

「な、何か用か？」

我慢できなくなり、ついに一言。

哉太は「ん？」と言葉を零し、声を出して笑った。

「そこまで警戒しなくていいのに、俺は龍之介りゅうのすけさんの弟子なんだ」

龍之介とは、達也を引き取った叔父のこと。

叔父が弟子をとる程の趣味嗜好があっただろうか。

「弟子って、何の？」

「内緒」

哉太は一言口になると、口の前で人差し指を立てて笑った。

まだ覚えたわけではない帰り道、哉太は親切心からか「家まで送るよ」と言う。地図はあるのだが、哉太と一緒に帰ると言うので必要がなくなってしまった。

「達也つてさ、なんでこんな田舎に来たん？達也が元々住んでたところより、ずっと不便になるのにさ」

哉太は帰り際に達也に問う。恐らく嫌味などではなく、他意のない純粋な問いなのだろう。

達也は少し考え、頭を掻いた。

「俺の両親さ、二年くらい前に死んだんだ」

「マジ？」

「マジだよ」

哉太は明らかに動揺した表情で、達也の顔を窺い始める。

達也はそんな哉太を見て、力なく笑った。

「別に、もう慣れたよ。今更誰に言われたところで、いちいち傷ついて堪るか」

「そう、か」

哉太の声は、段々と落ち込んでいった。傷を抉るような言葉をかけたことが、相当ショックだったのだろう。

「まあ、俺の両親は周りの反対を押し切って結婚したからさ、俺や俺の弟は両親が死んだ今、厄介モノとなったわけだ」

「達也つて弟もいるのか」

「ああ。それで、親戚中をたらい回しにされてたときに、叔父さんが引き取ってくれた」

哉太は黙りこみ、顔を逸らした。二人の間に沈黙が訪れる。

「なあ、達也」

沈黙を破ったのは哉太だった。

哉太は立ち止まり、不意に立ち止まり驚いた達也の顔を見つめていた。

「何があったのかとか、今何を思ってるとか、よくわからないからさ、傷つけることとかたくさん言うと思う。でも、もし辛くなったりしたら・・・」

哉太の瞳は達也を真つすぐ見据えた。

「頼っていいから」

「ッ・・・」

達也は唇を噛み、俯いた。

友達と呼べるモノは作ることができなかった。

一つは瞳の色のせいだ。現実離れたその瞳の色を見て、近づこうとする者は少なかった。

そして二つ目は、住居を転々とするためだ。両親が他界してから、長い間繋がりを保てるわけもなく、仲良くなった友達とも会えなくなった。

だから純粹に、その言葉は嬉しい　　・ ・ ・

「・・・ありがとうな」

正面からお礼を言うことが恥ずかしくなり、無意識に顔を背けてぼそりと呟く。後ろから、笑う哉太の声が大きく響いた。

「おかえり!!」

家に帰ると、満面の笑みを浮かべながら両手を広げる叔父が立っていた。

達也は少々怯みながらも「ただいま」と言う。叔父の視線に達也は目を逸らした。

前にこの言葉を聞いたのは、いつだっただろう。

当たり前のように聞いていた「おかえり」は、いつの間にか聞かなくなっていた。

懐かしい言葉を聞き、むず痒く感じた。

達也はそれと同時に、無意識だが笑顔を浮かべた。

遇い

この出会いは偶然か、それとも必然か。

俺は、この出会いが俺の人生を大きく揺るがすことを、まだ知らない
・・・

「待て、このッ」

今日は朝から風が強かった。ゴウゴウと音がしては、周りの木々が
暴れ出す。天気はよく、雲ひとつない快晴だと言っのに、この風は
なんなのだろうか。

「くそッ」

達也は悪態づきながら手を伸ばす。

その手の先には、一つの帽子が風に乗っていた。達也の帽子が飛ば
されたのである。

達也は長い間帽子の動きを窺いながら、帽子を見失わないようにつ
いていく。風は相変わらず止まず、帽子は吹く風に乗りながら天を
舞った。

「落ちろ！」

達也は痺れを切らし、舌打ちをした。すると、それに反応したかの
ように帽子はいきなり力をなくし、ポトリと地面に落ちた。

達也は「へ」と声を漏らしたが、帽子を拾い上げて汚れを払った。

「ったく、今日はなんなんだ」

ため息をつき、帽子を被った。と、同時に視線が目の前から上に移
る。

「で・・・ヶエ山だな」

達也が帽子を拾ったその目の前には、大きな山が在った。

その山の緑は、絵の具で描かれたように鮮やかで、太陽の光に当たり輝いていた。そしてその山は、見渡す限りこちら辺で最も大きな山だった。

「さて、帰るかな」

湧き上がる好奇心を必死に抑え、家に帰るために山に背を向けた。

・・・リイン

突如、背後から鈴のような綺麗な音色が聞こえた。

ふと気付くと、強い風はもう止んでいた。もしかしたら風がここへ導いたのだろうか。

「鈴・・・？」

絶えず聞こえる鈴の音の聞こえる方向を見つめ、ゆっくりと動きを止めた。

山の中から聞こえる。

「ダメだ、好奇心に負けるなよ・・・俺」

そう言いながらも体は、山の麓へと寄り添っていく。達也は項垂れながら、「ちよつとだけだからいいよな」と自分を納得させ、草を掻き分ける。

伸び放題に伸びる木々や草は、山を塞ぐように生えている。

ガサリ、ガサリ

掻き分ける度に擦れる葉の音を聞きながら、山に入ろうと体全体を使って葉を除けた。

「何だ、これ」

体を無理矢理草の中に入れた。体中チクリと痛みを感じるが、構うことはなかった。痛みを忘れ、目の前の光景に見入っていたのだ。

そこは綺麗な道だった。

綺麗、と言える道ではないのだが、もつと草と木々の葉が邪魔するだろうと思っていた予想が見事に外れたのだった。

そして、一番奇妙なのはその道の造りだった。道に生えていた草むらはもちろん、多くの木々までもが、まるで達也を避けるように不自然に曲がっていた。

達也はその道を遠慮がちに通り始める。

・・・リーン、リーン

鈴の音と一緒に、鳥の羽音が聞こえ、どこからか水が滴る音が響き、葉と葉の間から零れる太陽の光がゆらゆらと揺れる。

足場は悪いが、不自然に歩きやすくなっている道を通りながら、山の中を忙しく見渡す。

動物こそいないが、何かが出てきそうな雰囲気だ。

道はずっと奥まで一本道だった。徐々に上り坂になり、息を乱しながら歩を進める。

暫く進むと、道の先に出口が見えた。

出口が見えたことが嬉しくなり、つい歩調が早まった。出口を勢いよく出ると、暫く薄暗い場所を歩いていたからか、眩しさに目が眩む。

「ここは・・・」

達也は辺りを見回した。視界に広がるのは広い草原と、その中心で天へと伸びる大きな大木だった。

達也は吸い寄せられるように草原の中心の大木へと近づき、手でそっと触れる。

その木は、古木でもあったようだ。生い茂る葉や、その大きい幹が達也にそう告げている。

大木はタイミング良く、強風に揺れる。

葉と葉が擦りあい、心地よい音を響かせた。達也はその音をじっと聞き、息をついた。

「誰だ、お前」

不意に声が聞こえ、達也はハッと我に帰る。声はまだ幼さが残る少女の声だった。だが、妙に落ち着いた感じがあり、幼さとの矛盾がうまれた。

声の主を探すために首を回すが、辺りに人影は見当たらない。幻聴かと首を傾げると、再び声がした。

「上だ」

達也は反射的に上を向き、驚きで目を見開いた。

「女？」

伸びる枝や鮮やかな緑の葉を背景に、さほど太くない枝に少女は腰を下ろし、達也を見下ろしていた。そしてその枝から立ちあがると、ひょいっと体を投げ出し、あまりにも軽々しく地面へと着地した。

「誰だ」

少女は繰り返すように言葉を口に出す。

達也は少女の姿を見つめ、息を呑んだ。

少女は達也より身長が低く、少女の頭は達也の胸の辺りしかない。それは他と同じだ。達也より小さい少女はいくらでもいる。ただ、この目の前にいる少女は体つきが細すぎだ。肌も真っ白で綺麗と言うよりは、少し青白い気がする。一見、栄養失調だろうかと思った。

少女は長い髪を耳にかけると、目を細めた。明らかに達也を不審がっている。

「俺、は・・・達也・・・だ」

「タツヤ？」

「そう、達也」

少女の言葉はどこかきこちなかった。

少女はふっつと息を吐くと、真っ直ぐ達也を見つめた。

・・・深緑の、瞳？

達也は少女の大きな瞳を凝視した。この少女は、自分と同じ『異形』なのかと思い、不謹慎ながらも少しだけ喜んだ。

少女の瞳は連なる山々の緑のように、深く鮮やかな深緑で染まっていた。相変わらず晴れている空から輝く太陽の光が、少女の瞳を宝石のように輝かせた。

少女の背中まで伸びる真っ直ぐな髪もまた銀色に輝き、浮世離れした少女の容姿の美しさに思わず息を呑んだ。

そんな思考を廻らす達也をよそに、少女は再び口を開き、ぎこちない言葉を並べた。

「帰れ、ここは人間が来る場所じゃない」

少女は先ほどよりも冷たく言い放った。

「じき『又シ様』が目覚める。その前に、山から出る」

有無を言わさない雰囲気を纏わせ、少女は達也の胸をぐつと押す。

どこからこんな強い力が出るのかと思うほど、異常に細い腕は達也の胸を強く強く押した。

達也はその力に負けて少女を背にし、元来た道を辿り直す。

その景色や少女に名残惜しさを感じたが、達也の直感が体に「帰れ」と命じているようだ。勝手に体が動き、あの奇妙な道の中に入った。

そのとき、ふと後ろを振り向くと、あの大きな木の下に立つ少女の姿は見当たらなかった。

絶えず鳴り続いた鈴の音は、いつの間にか消えていた。

その日少年は、この村のカミサマに出会った・・・

哀

故意に、哀しみを消すことは難しい。
時を隔て、哀しみを忘れることも難しい。

だから人間は、無意識に哀しみを惑わそうとする

．．．

最近はずえている間に無意識に泣くことが多い。
この村に来た日、気付けば頬に涙が伝っていた。それを不審には思
ったが、肝心の理由がわからずにいた。夢を見ていた気はするのだ
が、内容は捨て去られたように思い出せない。喪失感に苛まれなが
ら、一日一日を過ごす。

そんな生活が続けること二週間、生活にも慣れ、気持ちに余裕が持
てるようになった。

深緑の瞳を持つ少女と大木のこと、自分が創りだした夢のように
朧おぼろになっていた。あれから一度も山には近付かず、叔父にもそのこ
とを話してはいない。

あの少女は一体何者だろう。

それとも本当に自分が創りだした幻想にすぎなかったのか、そんな
気さえ感じる。

「達也くん、起きてー」

ここは二階の達也の部屋、一階から叔父の大きな声が聞こえる。
達也は視界に映る天井をぼうつと見つめ、暫く動きを止める。そし
て大きく伸びをすると、ベッドから降りようと体を起こした。ベッ

ドの軋む音を聞きながら、床に裸足をつけた。

部屋にある鏡を見ると、自分の顔はまだ寝ぼけ、もともとクセがついた髪に、寝癖が足されて酷く笑える顔になっていた。

達也は扉を開け、目の前にある階段を一段一段降りて行く。

一階はバターのいい匂いが充満していた。叔父は椅子に座り、達也を見ると「早くしないとパン冷めちゃうよ」と笑っていた。

パンは二人分、叔父と達也の分がちゃんと用意されていた。

「おはよう、叔父さん」

「おはよ、達也君」

「ささ、早く食べて学校行きなよ」

叔父さんはそう言っていると、パンを口に入れた。

「いつてらっしやい」

「いつてきます」

微笑みながら欠かさず見送る叔父に手を振り、待ち合わせ場所に急ぐ。

家は近くないが、方向が同じということで哉太と登下校を一緒にすることになった。待ち合わせ場所は、その途中にあるバス停だった。

「あ、達也」

「おはよ」

いつも何故か哉太は先に待っている。

こいつ何でこんなに早いんだろうな、と呟いていると、哉太は先に歩いていた。達也は慌ててその背中を追いかけると、ふと視線を右に向けた。

「あの山・・・」

右側に見えたのは、謎の少女と古い大木と出会った幻想のような山。大きく在るあの山は、いつ見ても鮮やかに緑を輝かすのだ。

「ああ、夢見山？」
ゆめみやま

「ゆ、夢見・・・山？」

哉太が納得したように、聞き慣れない言葉を口にする。達也は即座に聞き返した。

「そう、夢見山。この村では大体の人がそう呼んでるよ。あそこには、この村の守り神がいる『らしい』んだ」

「『らしい』？行つたことないのか？」

「行きたくても、山の中には入れないんだ。俺を含め、村の人は皆山に入ることができない。どこから入っても、方向を確かめても、気付いたら山の麓にいる。それが夢見山」

「入れない？」

達也の心臓が妙に高鳴るのを感じた。

「だから観光客は面白がつて、山に入ろうとするんだ。変に噂が一人歩きしてゐるらしくて、『妖山』あやかしやまとも呼ばれてるんだつて」

哉太は苦笑しながら夢見山を見る。

達也もつられるように夢見山を見つめ、ふうつとため息をついた。

「なあ、哉太。ちょっといいか」

「ん？」

「俺、昨日山の頂上に行つてきた」

「えッ・・・」

哉太は達也を顔を凝視し、二人の間で沈黙が続いた。哉太は余程驚いているようで、瞬きを忘れていた。

「頂上には、大きな木と・・・やけに細い、栄養失調気味な小さい女がいた」

「大きな木は、多分この村の守り神だよ。そんで、その女の子とやらは多分『ヤドリギ』だと思う。信じ難い話だけど、やけに辻褄が合うからなあ」

「『ヤドリギ』？何だそれ」

「えつとね　・・・あ、学校着いた」
話に夢中になり過ぎて、学校に着いていることに気付かなかった。
哉太は眉を下げると「またあとで教えるからな」と苦笑した。
達也は不満げに口を尖らす、やがて諦め二人は揃って校門を潜った。

「渡部え、目エ死んでるぞ」

「そつとしといてやれ、由高^{ゆたか}。もともとだ」

「誰がもともとだ、コノヤロウ」

二人の会話が丁度耳に入り、反射的に言い返すと、二人は一斉に達也の顔を見る。

「聞いてたのかあ」

由高と呼ばれた少年は、にいつと笑いながら近くにあつた椅子に勢いよく座り、もう一人の少年、和弘^{かずひろ}も続くように椅子に座った。

「あれれ？カズとゆっちゃん、お揃いで何してんのさ」

そこに丁度トイレから帰ってきた哉太が加わり、四人で円を創るように座った。

だが、哉太だけが腑に落ちないようで、手をひらひらさせながら和弘と由高に言う。

「ほら散れ散れ、俺らはこれから夢見山の話すんの。お前らはどうせ『神様なんていない』って茶化すんだろ？」

「夢見山？なんでそんな話すんのさあ」

由高が口を尖らせ、哉太と達也を交互に見る。

「聞いて驚くな！こいつ、あの夢見山に入ってシオウ様と『ヤドリ

ギ』に会ったんだってよ!!」

「なんでお前が自慢げなんだよ」

哉太の言葉に、和弘が呆れ気味にため息をつく。

「シオウ様？」

「ああ、達也はまだ知らなかったか。達也が見た大きな木、つまりこの村の守り神の名前だよ。村ではその名前が伝説として伝わってんだ」

哉太が人差し指を立てて説明する。

「まあ、その伝説だって薄れてきて、今じゃ子供は誰も信じないけどねえ」

由高は哉太の説明に、付け足すように言葉を紡ぐ。

「お前もだろ」

哉太が横目で由高を睨むが、由高は気にする素振りを欠片も見せず舌を出すと、悪戯な微笑みを浮かべて達也を見つめる。

「でも、山に入った人がいるなら別だよねえ。俺も入ってみたいなあ」

「お前じゃ無理だ、存在自体が怪しい奴め」

「ちょッ・・・カズちゃん!? 今酷いこと言った!？」

「気のせいだ」

和弘と由高のやり取りを横目に見ながら、哉太は大きくため息をつき「やっぱり好奇心で喰いついてきたか」と呟いていた。

「ガキ共、席に着けー!!! 授業始まるぞー!!!」

怒鳴り声と共に勢いよく教室に入る椿の姿が視界に入り、話は一時中断となった。

「なあ、達也・・・放課後、夢見山に行ってみるか？」

ぼそりと声が聞こえ、ハッと我に帰る。どうやら無意識に考え事をしていたようだ。今が授業中だということも、頭からすっかり抜け落ちていた。

声の主は、後ろの席の哉太だった。

達也は微かに後ろを見ると、哉太が机に肘をつきながら達也を見ていた。

「お前、『気になる』って顔してるよ？無意識か？」

「え・・・全然気付かなかった」

哉太の言葉に、達也は即座に自分の顔を触る。必死に『気になる』という顔を直すと、哉太に向けて呟く。

「付き合ってくれんのか？」

「当たり前じゃん、もしかしたら俺も夢見山に入れるかもしれないし・・・こんな体験、滅多にないだろうからな。それに、もしかしたらお前は・・・」

「オイ、てめエら」

突然の、地の底にまで響くような低い声が、上から降ってくることに二人で驚いていると、頭に激痛が走る。「うッ・・・」と声を漏らしながら目を瞑り、必死に痛みに耐える。

激痛が伴い、何が起きたかわからない表情を浮かべていると、そこには椿が立っていた。どうやら椿に拳骨をくらわされたらしい。

「授業中に俺様を無視して私語たあ、大層いい御身分だな？達也、哉太」

椿は不機嫌そうな顔を一切消し、ニコリと優しい微笑みを浮かべる。椿に限って『優しく笑う』などあり得ない。あり得るとするならば、明日は世界が滅びる。

そんなことを表情一つで一瞬にして諭されると、達也はふと思う。

・・・あ、これヤバイ。

そう思ったときにはもう遅く、椿は今までにない程奇妙な笑顔を見せながら言う。

「お前ら二人・・・明日から二週間、放課後補習だ。特別にしごいてやるから覚悟しとけ？」

「悪いな、巻き込んだみたいで・・・」

放課後、太陽の位置も低くなってきた頃、達也と哉太は授業を終えて下校していた。

達也は申し訳なさそうに眉を潜め、項垂れる。哉太は苦笑して達也の肩に手を置いた。

「言っなつて、寧ろ喋りかけた俺が悪いからね」

二人は並んで歩き、夢見山へと向かう。

沈黙が二人を包む。ゆらりゆらりと揺らぐ、目の前に浮かぶ自分たちの黒い影を見つめ、二人は互いに沈黙を繋げていた。

長く、短い沈黙を破ったのは、達也だった。

「今、何か聞こえなかったか？」

「何かって？　　ってもう着いてたのか」

二人は沈黙に気を取られ、夢見山が目の前に在ることに気付かなかった。哉太は苦笑し、「早く入ってみよう？」と達也の腕を引く。

ガサリ、ガサリ

初めて入ったときと同じように、山を守るように塞がる壁のような草木に手をかける。

この草木を除ければ、奇妙な道があるはず　　・・

・・・リイン

突如、鈴の音が頭の中で響いた。

達也は草を除ける作業を止めて後ろに下がり、頭を押さえながら齒

を食いしばる。

哉太は達也の行動が理解できずに、辺りを見回す達也を見つめていた。

・・・リイン、リイン

「うるさい、うるさい!!」

綺麗に響くはずの鈴の音は、暗く澁み頭で震える。そして以前よりもうるさく耳障りに聞こえる。

? ユノ、ユノ?

? そんな格好で寒くないのかい??

? ユノ、笑って?

? ユノは僕の大切な存在だから?

? 自己犠牲になるな!!?

? ユノは・・・優しすぎるよ?

「俺の頭の中にいるのは誰だ!!」
流れるように、辿るように、見知らぬ『誰か』が頭の中で喋っている

る。映像として頭の中に映される『誰か』は、声からして男だとい
うことがわかった。それも、まだ幼さが残る少年の声だった。その
『誰か』は達也の頭の中で笑っていた。泣いていた。怒っていた。

顔はどうやっても見えない。顔だけが絵具で白く塗りつぶされたよ
うに、隠れていたから。

知らないはずなのに、見覚えなどないはずなのに。

「俺はお前を知っている・・・？」

「達也！！」

達也はハッと顔を上げる。目の前には、哉太の驚愕し動揺した顔が
あった。

哉太は達也の両肩を掴んでいる手に、少しだが力を込めた。

「大丈夫か？」

「　　だ、大丈夫だよ」

ポタ　・・・と下に生える雑草に滴が落ちる。何度も、何度も。

「た、達也ツ・・・！？どこか痛い！？」

頬に温かい滴が伝う。瞳から頬に、頬から顎に、そして重力で雑草
へと滴った。

達也は必死に首を横に振った。訳のわからない胸の痛みを、心の奥
に隠して。

哉太が必死に宥めるが、達也は泣き止まなかった。

I

人は、自分自身を保つために笑い、泣き、怒り、自分を彩っていく。
『世界』という名の囲いの中で、

『自分』は今日も、カミサマが決めた道を歩くのだ。

真夜中、誰もが寝静まった時間、達也はふと目が覚めた。

いつものように涙を流しているわけではないことを不審に思い、ベッドから降りる。

ドクン、ドクン . . .

何故か高鳴っている自分の鼓動、ザワリザワリと肌を撫でる訳のわからない違和感。

直感だが、何かあるのだ。

時計を見ると、十二時を回っている。多分叔父は寝ているだろうが、階段から律儀に玄関に行けば、物音で起きるかもしれない。

達也は部屋の窓を見つめると、決心をする。

「現実でこんなことするなんて、思いもしなかったな」

窓を開け、近くに伸びる太い枝を探して、ゆっくりゆっくり足を伸ばす。何とか落ちずに乗り移り、そのまま器用に木を下りていく。靴はないが、引っ越した際に持ってきていた、昔の上履きを使っていた。躊躇いはあったが、状況が状況だ。

地元の人ほどではないが、達也は元々運動神経がいいので、難なく木を下りることができた。低いところまでくると一気に飛び降り、家のほうを向く。

「叔父さん、ごめん。すぐ戻ってくるから」

寝てるであろう叔父に謝り、くるりと踵を返して走り出す。

向かう先は ・・・夢見山だ。

しんと静まり返る村を、一人走り抜ける。

月明かりが村を照らし、真っ暗ではなかった。走りながらふと天を仰ぐと、雲ひとつない夜空、瞬く星に息を呑み、再び前を見据える。暫く経った。否、正確に言えば暫くに感じた。距離はそう遠くないが、走っている間がとて大きく感じたのだ。

夢見山が月明かりに照らされ、いつもと違う雰囲気を纏っていた。相変わらず、体の違和感は消えない。だが、ザワリザワリと体を撫でる感覚に、少しばかり慣れ始める。

達也は持参した懐中電灯を点けると、夢見山を塞ぐ草木に突っ込んだ。草木を除け、どんどん体を山の中に押し込む。

壁のような草木が急に抵抗力を失った。達也は押し込んだ力の反動で転がるように中に入った ・・・正確に言えば転んだ。「いつてエ」

懐中電灯を照らすと そこは前に見た、奇妙な道だった。真夜中だからか、異様な光景に不気味さが増している。達也はここから早く抜け出すべく、小走りで道を進んだ。

二回目とくれば見慣れるもので、奇妙に曲がった木々も当たり前だと思えるようになった。達也は少しだけ、人間の順応力を褒めたくなった。

弱い光が道を照らす。出口から流れ込む月明かりの柔らかい光だった。

明るくなってきた道に必要がなくなり、懐中電灯の光を消す。

出口に手をかけ、勢いよく体突き出す。

サア　・・・と風に靡く草原、大きく強く天へと伸びるこの村の守り神、そして全てに平等に降り注ぐ、神秘的な柔らかい月光。全てが浮世離れた世界に見えた。

「何しに来た」

急に声をかけられ、ビクリと体を震わす。だが、聞き覚えのある声に安堵の息を漏らし、声したの方向に顔を向けた。

「ゆっくり、話そうと思ってさ」

「帰れ」

即答だった。

目の前に立つ少女は、以前と何も変わらない。全くの無表情に、ぎこちない言葉、そして光り輝く達也と同じ異形の瞳。以前も達也はこの少女に見入ってしまったのだ。

「お前の名前、聞かせて？」

達也はそっと呟く。

大声を出す気になれないのは、きっと真夜中のせい。

「私に名などない、とうの昔に捨てた」

少女の表情が悲しげに映るのは、きっと柔らかく照らす月光のせい。

「お前の名前は」

頭の中の『誰か』がそう呼んでいた。誰に向けてかはわからなかったはずだったのに、達也は無意識に、少女に向かってそう呼んだ。

「ユノ」

「！！」

少女は大きく輝いていた瞳を、より一層見開く。

「リクト・・・」

少女は眉をひそめ、消え入りそうな言葉でそう呟いた。

すぐに悟る・・・『リクト』が、達也の頭の中にいる『誰か』なのだ。

そして『リクト』が呼んでいた『ユノ』が、目の前に立つ少女の名だと。

パズルのピースがはまっていくように、抱いていた疑問が解けていった。と、同時に達也の頭の中に再び見知らぬ映像が流れ込んだ。

「ユノは笑ってくれないのかい？」

「笑わないんじゃない、笑えないんだ。馬鹿リクト」

再び『リクト』の声が聞こえる。もう一人は　・・ユノだ。

以前はリクトが目の前にいて、達也をユノと呼んでいた。つまり、ユノの目線だったといことだ。だが今は、多分『リクト』の目線だ。目の前にユノの顔があり、ユノの瞳に映る『達也』は、間違いなく以前見た『リクト』だ。

ユノは今よりもずっと表情豊かだった。自然に眉をひそめ、舌を出して『リクト』を見る。

「『ヤドリギ』は本来、人間が務めるモノじゃない。だから人間の私が『ヤドリギ』としての力を得る代わりに、私の中の人間を徐々に殺していく。表情は少ししか、残っていない」

ユノは目を細める。

「でもこれは私が望んだことだ、お前が気にすることじゃない」

「ねえ、ユノ」

「なんだ？」

「ユノは・・・優すぎるよ」

ユノの瞳に映る『リクト』は、悲しげに微笑んでいた。

「　　・・・ん」

瞼を開けると、見慣れた天井があった。ここは　　自分の部屋、のベッドの上。

モゾモゾと動きながら、まだ寝ている頭を働かせる。

「ここは・・・って、あれ？」

達也は頭を掻くと、動きを止める。

俺は山の中にいたはず、どうしてベッドで寝てるんだ？

達也は記憶を巻き戻してみるが、映像が頭の中に入ってきたところまでしか覚えていない。それとも、それすら全て夢だったのだろうか。

そこまで考えて、首を横に振る。

根拠はないが、あれは絶対夢ではないと思えるようになっていた。

「達也くん、起きてー」

いつものように聞こえる叔父の声を聞き、達也は気持ちを切り替えた。

結局、夢見山のことも、ユノのことも、シオウ様のことも、まだよくわからないままだ。だけど、あの記憶のような映像は『リクト』やユノが伝えたかった大きな想いだと思っている。『ヤドリギ』だとか守り神だとか、よくわからないことだらけだが、それでいい。

「おはよう、達也！ー」

「達也、おっはあ」

「はよ」

「ねえ、ゆっちゃんもカズも、なんでいるの？」

哉太は不満げに、いつの間にかいる和弘と由高を睨む。

「決まってるじゃん」

「・・・家近いから」

俺はこれからもこの村で生活する。現実離れた存在が住む、この村で。

「だからってオイ、達也から離れろ」

「やあーだ」

由高が哉太に舌を出す。由高は達也にしがみ付き、哉太を挑発しているのだ。

達也は広がる青い空を見上げ、柔らかに微笑んだ。

拝啓、父さん、母さん。

まだわからないことだらけだけど。

多分、たぶん俺は、ここにきてよかったよ。

哉太が由高や和弘と言い合いをしているのを、達也は苦笑しながら見ていた。

I（後書き）

ここまで読んでくれた方、本当にありがとうございます。
さて、ここで第一章『アイ』が終了しました。

ここまででたくさんの疑問点が浮かび上がるように
した・・・つもりでございます。

・ユノと『リクト』の関係性

・達也は何故、ユノの名前を言い当てたのか

・達也は何故、山に入ることができたのか

・夢見山とは何か

・達也が見た映像とは何か

・『ヤドリギ』とは何か

・鈴の音の正体

・えーと・・・龍之介（叔父）と哉太の関係（？）

・達也の紫の瞳の秘密

などなど。

あ　・・・よく見ると、結構多いなあ（笑）
あとは、あれだ。

・達也の過去

・達也の弟登場

・叔父の仕事（特技）

とか・・・必要ないようでは必要な話とか、ちよくちよく入れます。
でもまあ、とりあえず第一章終了ということでは

飽きっぽいあたし、よく頑張りました

第二章からも、さらに話が入り組んでくると思いますが
多分読み返せばわかる・・・と、思います。

えーと、意味不明なところとか、矛盾点とか見つけたら
なんなりとお申し付けくださいな（笑）

はい、雑談ですが。

第一章の話の題名、全て読みが「アイ」になってます。

はい、今更何言ってやがんだデスネ。

気にしないであげてください。

それでは、これから第二章へ突入です！！

これから「なんとか山のなんとか様」よろしく願います！！

夢

瞼を閉じると広がる世界。

幻であるとわかっていながら、聞き、触れ、感じてしまふという夢は、

実に質^{たち}の悪い現^{うつ}である

．．．

ユノの名前を知ったあの日から、数日経った。

内容を忘れてしまう夢は今でも続くが、多分『リクト』とユノの夢だろうと納得する。

そして相変わらず叔父は優しく、達也は完全に心を開いていた。

もしかしたら、俺の紫の瞳を見ても．．．怖がらないでくれるのかもしれない。

そう、思い始めるようにまでなったのだ。これは叔父だけに思っているのではない。哉太や和弘、由高、クラスメートや先生、村の人々。この村に住んでいると、村の温かさで達也の不安が和らいでくるのだった。

「おはよ、達也」

やはり、いつもと同じように待っている哉太。何故哉太はいつも早くから待っているのだろうか。達也はそんな疑問を浮かべながら「おはよう」と笑う。

「おつはよ、タツ、カナツち」

「ああ、渡部と哉太か。はよ」

「絶対待ち伏せしてただろ」

哉太が声を低くし、二人を睨む。

最近はずいぶん由高と和弘も加わり、四人で登校している。哉太は二人（主に由高）を敵視し、登校中はずっと睨みを利かせているのだが、なかなか楽しい時間だと思っている。

哉太も根っから二人が嫌いなわけではないらしい。

由高はいつの間にか達也のことを『渡部』ではなく『タツ』と呼び、そのことについても哉太は気に食わないらしく、由高と達也の間に入る。

哉太曰く『ゆっちゃんは何考えてるのかわからないから』らしい。実際達也も、未だに由高という人間を把握しきれていない。

どちらかと言うと無口だが和弘のほうがわかりやすい。和弘はハッキリと物を言う、サッパリした性格だからだ。

「待ち伏せじゃない、先回りだよお」

由高がニツと笑い、哉太に言う。

「余計悪い！！」

哉太が声を張る。声は遠くまでよく響いた。

由高は比較的身長が低く、誰から見ても完全な童顔で、細い体つきに狭い肩幅。傍^{はた}から見れば少女に間違えられかねない程、その外見は可愛らしかった。

昔、その容姿から誘拐されかけたこともあり、誘拐犯もまた彼を少女だと思っていたらしい。そのころはまだ幼かった彼だが、その細い腕で自分の身長の上二倍以上ある犯人を、背負い投げで投げ飛ばして警察に通報、被害は犯人の背中だけで押さえたのだった。

「俺、今更だけど・・・ゆっちゃんが分からない」

哉太が頂垂れる。

「ええ、何でえ？一番分かりやすいでしょ？」

「どこがだ。どっからどう見て『分かりやすい』と言えるんだよ？寧ろ存在自体がよくわからない奴だよ、馬鹿め」

「あ、それ前にも同じようなの聞いた」

「くたばれ」

和弘が冷たく言い放ち、由高は「酷いなあ」と苦笑している。和弘と由高は、性格はまったくの真逆だが、喧嘩しているところを見たことがない。否、もしかしたらこの会話が既に喧嘩なのだろうか。

「仲、いいんだな」

達也は羨ましそうに微笑む。

「は？誰と誰が」

和弘は思い切り嫌そうに顔を歪めると、達也は和弘の顔を気にも留めずに「カズと由高がだよ、羨ましいな」と言った。恥ずかしげを微塵も見せないハッキリとした言い振りに、三人は呆然と達也を見つめた。

そして、もしかしたら一番の強者は達也かもしれないと、心でそう思いながら。

「何で補習、つつちい　・　見逃してよお」

ダラリと上半身を机に垂らしながら、哉太が強請る。ねだ

下校時間、帰ろうとしたところに、椿に後ろから襟首を掴まれて教室に取り残されたのだ。「お前ら、補習あんだろうが」という椿の言葉と共に、達也と哉太は揃って顔を真っ青にしながら。

現在、十分もしない内に哉太が駄々をこね始めたのだ。

椿はというと、煙草を口に啜えながら、椅子の背もたれに思い切り

寄りかかり脚を机に乗せている。つまり、教師が普段するような格好ではないのだ。

その様子を見て哉太が小声で「倒れてしまえ」と呟いていた。達也はその言葉が聞こえてないか心配だったのだが、幸い聞こえてないようだった。

「黙ってやつてろ、俺だってホントは仕事あんだからな」

「やってないくせに」

椿の言葉に哉太はいち早く反応し呟くが、今度は聞こえたみたいだ。椿は眉間に皺を作り、ギラリと鋭く目を光らせる。その視線は針のようだった。

「なんか言ったか？ああ？」

「いえ、すみません」

さすがにやばいと感じたのか、哉太は机に突っ伏しながら謝罪する。と言っても、心は欠片も籠ってないのだが。机に向かって言っているからか、声が籠って聞こえた。

「達也を見習え、もう課題半分終わってんぞ」

「え、マジで！！？」

「ん？」

急に話を振られたことで動揺はしたが、躊躇いがちに頷く。

「なんで？なんでそんなに早いんだ！！達也は馬鹿じゃなかったのか！？」

「どっから仕入れた？その情報」

達也は顔を歪める。勝手にバカ呼ばわりされたら堪ったものではない。哉太は「どこって、なんか・・・性格が？」と訳のわからないことで口籠っているが、気にしないでおいた。

「ほら、早く終わらせる。夜になっちまうぞ」

「達也、ちよっと手伝って？」

「いや、頑張れ」

「いや、手伝って？」

「いや・・・」

そんなやり取りを続けながら刻々と時間は過ぎ、帰る頃にはすっかり夜になっていた。だが、椿は生憎夜道だからと言って、家まで送るほどの善意を持ち合わせていない。つまり、これから徒歩で家まで帰らなければいけないのだ。

「つつちの鬼、可愛い可愛い生徒をよくもまあ、こんな暗い夜道に放っておけるよね」

哉太が嘆くように椿に言うが、椿は煙草を啜えながら淡々と言った。
「よく言うだろ？『可愛い子には旅をさせろ』ってな。というわけで、じゃあなクソ餓鬼共」

心が籠っていない言葉を、あれだけ淡々と並べられる椿は相当図太い神経だ。椿はひらひらと手を揺らすように振ると、振り返りもせずに愛車に乗った。

「じゃあな、気をつけるよ」

それだけ言うと、車を発進させた。達也は「気をつけるよって言うなら、車に乗せてけよ」とぼやく哉太を宥めると、夜空に向かって手を伸ばした。

「ま、夜の散歩もいいんじゃない？」

そう言ってみるのはいいが、さすが田舎と言えるだけの村。元々学校の周りには民家がないため、夜道は更に不気味に映る。

前にユノに会いに行った時は夜中で、こんな道より更に気味が悪かったはずだが、何故だかあのときはそれ程怖く感じることも、気味悪く感じることもなかった。

携帯を鞆から出し、時計を見ると八時を過ぎている。どつりでこんなに暗い訳だと納得していると、隣にいた哉太が急に腕を掴む。

「ちょッ・・・痛エから」

段々掴む力が強くなり、痛みに顔が少し歪む。だが、それよりも哉

太はどうしたのだろう。現状把握が優先になり、痛みにはじつと堪えた。

哉太を見ると、体が小刻みに震えていた。腕を掴む手も震えているため、気のせいではないようなのだが、一体どうしたというのだろうか。

そこで、一つの可能性がふと浮かぶ

「なあ、哉太。まさかお前、怖いのか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

「何だ？その不自然な間は。やっぱり怖いんだろ？」

「な、んの、こ、と？」

「声が途切れてんぞ？」

観念したようで、哉太はため息をつくとかくように語り出す。

「昔ね、カズとゆっちゃんと夜まで外で遊んだんだ、かくれんぼしててさ。俺、茂みに隠れてずっと待ってたんだよね、そしたら皆知らない内に帰っちゃって、俺は一人ぼちで待ってたんだよ。その時の孤独と言っちゃ、言葉で言い表せないほど酷かった。ほんと、二人とも酷いよね。次の日責めたら『だって眠かったし』で終わらせたんだよ？それで暗いところラウマになっちゃって」

「はいはい、わかったから黙れ」

流れるように出てくる不満と怒りの言葉を、達也は呆れ気味に宿める。哉太は口を閉ざ

し、沈黙が二人を包んだ。夜の涼しい風が、すうつと二人の間を通った。

達也は深く空気を吸うと、体の中に溜まった空気を勢いよく出した。

「哉太」

「何？どうかした？」

哉太は達也の雰囲気の変わりように気付いたのか、極力真剣に答えた。

「俺、どうしちゃったんだろう」

「へ？」

いきなりの言葉に、哉太は思わず素っ頓狂な声を漏らす。が、達也の声があまりにも弱々しいことに気付き、何も言わず次の言葉を待った。

「俺な、もうなんかよくわからねエや。なんでユノの名前を知ってたんだ？ていうか俺の頭の中に映像が流れるんだ？おかしいだろ」
「ちよつと待って、落ち着け」

冷静さが欠いている達也は達也らしくなかった。明らかに動揺している達也を落ち着かせ、哉太はゆっくりハッキリ、言い聞かせるように言った。

「どうしたの？」

「俺さ、何日か前に、夜中起きたんだ。そりやもうパツと、眠気なんて一瞬で吹っ飛んだようにさ。何故かあのとき、夢見山に行かないやいけねエって思っ、家抜け出して山に向かって走った」

「うん」

哉太は相槌を入れ、そつと顎に手を添える。

「それで、前に入ったときと同じように入った。麓に塞がる壁のよ
うな草木を除けると、やっぱりそこには奇妙な道があつてさ」

「うん」

「同じようにそこを通った。道を抜けると、同じように大きな古木と、広い草原と、哉太が『ヤドリギ』って呼んだ女が立ってたんだ」

「うん」

「俺は・・・そいつの名前を知っていた・・・？違う、知らない！！」

「・・・達也？」

「知らないッ・・・お前は誰だ！！何者なんだよ！！」

「達也、しっかりして！！」

頭を押さえる達也の肩を掴み、大声をあげて達也を呼んだ。達也はハッと我に返り、哉太を見る。朦朧とした視界は次第にハッキリとしていた。

滲み出る汗が、顎に伝い落ちる。

「落ち着いた？」

「ああ、悪い。取り乱した」

「いいよ、気にしないで？」

哉太は微笑む。哉太の表情は柔らかく、達也の心を安心させた。

「・・・前に、哉太と一緒に夢見山行つたろ？そんなとき、頭に映像が流れ込んできた。なんだかわからねエけど、前も同じように取り乱したよな、俺」

苦笑しながら達也は弱々しく言う。哉太はじつと黙って達也を見つめていたが、やがて息をつき達也に言った。

「ごめん、先に言っておけばこんなに混乱しなかっただろうな。夢見山が『妖山』と呼ばれるようになったのは、山に入れないからっただけじゃないんだ」

「え？」

「夢見山・・・字通り夢のように記憶を見ることから、夢見山と呼ばれる」

「どういう、ことだ？」

「夢見山っていうのは、山に近付くと自分の記憶の中のナニカが、自分の頭の中に流れ込んでくる感覚に陥るために名付けられた名前なんだ」

「自分の・・・記憶？」

「主に、自分が忘れていた記憶かな？」

達也は前のことをよく思い返し、首を横に振る。

・・・違う、あれは？俺の？じゃない。

「そんな奇妙なことが起きることから、夢見山、または妖山と呼ばれるようになったんだ」

哉太の言葉は、達也を更に不可解な世界に連れ込んだ。

わからないことが余計わからなくなった。

『リクト』が視点になったり、『ユノ』が視点になったり、まるで憑依でもしているような不思議な感覚だった。これが『自分』の記憶だと言うなら、前世だとかという夢のようなことも可能性に出てきてしまう。と、言ってもこの村に来てから、夢のような体験しかしていない気がするのだが。

達也は気を紛らわすために勢いよく首を振ると、思い出したように言った。

「あれ？哉太、もう怖くねエのか？」

「あ」

・・・現実のような夢物語は、夢のような現実となって少年の周りを渦巻いた。

複雑な思いが入り混じった中、少年は惑わされぬよう、必死に前を向いて歩いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4649y/>

なんとか山のなんとか様

2011年11月23日14時56分発行